

語彙の特性から見る語彙史研究の諸相

—「語彙的カテゴリー」「部分語彙」「反現象」「反作用」「中和」—

安部清哉

論文要旨

語彙史研究に関して、次のことを論じた。①研究史を概観し、理論的研究における課題を明らかにし、それを踏まえて、②語彙研究における研究パラダイムとしての「語彙的カテゴリー」を分類整理し、その体系化を試みた。また、③語彙独自の特性によって語彙史を解明することが有効であるという考えに立ち、語彙独自の構造的特性と史的特性として、「反作用」「反現象」「中和」の諸現象と「部分語彙の諸特性」に関して論じた。

キーワード【語彙史研究、語彙的カテゴリー、語彙変化における「反作用」、語彙変化における「反現象」、語彙的分類概念の「中和」】

- 1 はじめに——語彙史研究の課題
- 2 語彙史研究から見た語彙的カテゴリー
- 3 語彙の特徴から見た語彙史研究の課題
- 4 語彙と部分語彙
- 5 むすびとして

第1章 はじめに——語彙史研究の課題

1-1 日本語の「語彙史」研究

日本語の語彙史の研究は、音韻史、文法史、文体史の研究に並ぶ日本語史研究の一分野である。

一般には、国語教育で習う文法や、英語学習などで意識されやすい音声、「作家の文体」などの表現で日常でも使われる文体などに比べると、「語彙」という術語の抽象性と専門性もあり、「日本語の語彙」の特徴や「語彙史」というものも、一般にはあまり具体的に伝わってはいないように見える。

また、術語のなじみの少なさのほかに、語彙史研究が日本語史の研究史の中でも比較的新しい分野であるという事情もある。

「先駆的な研究は別として、本章の立場での語彙研究の本格的な進展は一九五〇年代からであり、音韻や文法研究の分野に比べて新しい研究でもあり、田中章夫『国語語彙論』が『語彙について』の研究は、(中略)言語学のほかの分野に比べてかなり遅れている』とした総括の状況は、20年以上たつた今でも変わっていない。」(湯浅二〇〇二、傍線引用者、以下同じ)

そのような遅れは語彙(史)研究の理論的整備の遅れにも現れてきている。

本稿では、語彙史研究において、この20年間長く課題とされてきている語彙(史)研究全体をまとめていくための理論的問題を取上げてみたいと思う。

まず、その抽象的議論を始める前に、具体的に「語彙史」の基礎的イメージを共有することから始めてみたい。

さて、「語彙」は「何らかの観点から語を集め、それを1つのまとまりをなすものとして見た場合の、複数の語の構成体」であるが、その語彙の史の変遷である「語彙史」は、どのようなものとしてとらえられるであろうか。いま、その問いを単純化させて「日本語の「語彙史」にはどのような特徴が見られるか」を考えてみたい。

例えば、文法の史的特徴としては、次のような点が明らかにされてきている(例えば、教科書的なレベルでは佐藤武義編著、一九九一『概説日本語の歴史』参照)。

①複雑から単純へという「単純化」の傾向(活用など)

②意味的・機能的に未分化という「総合的傾向」から「分析的傾向」へ

③統語的構成において、情意性の強い関係よりも「論理的関係」を優先する傾向へ

④「聞き手に対する意識化」の傾向(敬語、人称、終助詞、要求表現、条件表現やコミュニケーション上の諸現象)

表現の相違はあれ、このような史的傾向が広く認められてきている。では、語彙史の特徴とはどのようなものであろうか。あるいはどのようにしてとらえられるであろうか。

1-2 「増加」の語彙史——「単語の増加」「語種の増加」「多音節語の増加」

日本語の「語彙史の特徴」として、例えば次のような点は、ある程度、共通理解になっていると言える点であろう。

○「語彙史の特徴」——「数的増加」の歴史

①語彙の要素である「語の増加」

②「語種の増加」(和語、漢語、外来語、混種語など)

③「多音節語の増加」

①は、音韻・文法でも単位や研究カテゴリーの増減は問題とされるが、語彙では語の増加が自明すぎるゆえか特徴とまでは認識されていない。また、この増大は相対的には名詞の比率増加であるが、

その時代毎の具体的諸相は必ずしもまだ明確になってはいない。

②は、語種3類の類型のみで言えば、漢語は上代に既にあり外来語は中世末のキリシタン資料で現れるから、語種自体の増加というより、ここでも漢語・外来語の各語彙の相対的な比率増大という計量的な面が指摘されていると言える。

②―ア 漢語の増大、②―イ 外来語の増大

③は、「多音節化」という音韻上の変化でもあるが、古代に基本的単位であった1音節語・2音節語から次第に長い形態が増加してきたという点で語彙の問題でもある(いつ、どのように、語構成単位が変化したかという点の詳細はまだ十分明らかではない)。

これら広く認められている特徴は「数的増加」に偏る傾向を示す。それ以外に、例えば、文法のような「質的变化」と言えそうな特徴となると、語彙研究者でも議論が分かれるのではないだろうか。

「数的増減」という目に見えやすい部分での共通理解は比較的得られやすいが、質的変化をどのように把握するかという点ではまだ定説的な解釈が得られていない段階にある。性格の異なる膨大な数の語が対象であるため、語彙全体を体系的にとらえる上での研究観点にも多様な考えや方法が提示され、研究自体を複雑にしているという事情がある。

○「語彙の要素が歴大であること、研究の観点も様々な切り口が可能であることから、個々の研究者の知見がばらばらに提出されてきた観がある。」(湯浅茂雄、二〇〇二)

つまり、特徴①の「語の増加」のために、語彙の全体像が把握されにくくなっていることも、研究の遅れの一要因である。

1-3 語彙研究・語彙史研究の理論的整備

上記の点以外に、「語彙の特徴」としてどのような側面を取上げることが適当かについても、必ずしも共通理解がない。そこには、一方で、語彙をとらえる理論的方法論的枠組みが、音韻や文法に比して必ずしも確立していないことが投影している。語彙量や語種や形態以外に、どのような特性が語彙特有の問題であるかという理論的問題についても議論が不足しているのである。そのような理論面での研究の遅れは、複数の語彙史研究者が異口同音に繰り返し指摘し続けている。

○「個々の観点からのすぐれた知見が、語彙の体系化の観点から統合される必要があるように思われる。」(湯浅、二〇〇二)

○「語彙論においては、計量的な立場から語彙を考えたり、意味的な関わりから語彙の体系を考えたりする研究が、近年かなり進められており、その理論化もそれなりになされている。しかし、語彙史論についてはなお十分な検討がなされていないように思われる。(略)語彙史の研究についてはなお理論化の必要な時代であると言えよう。」前田富祺、二〇〇二、二五五頁。

○「二〇〇四年の橋本行洋氏展望でも「語彙史の理論面における整備は今後の課題として残されている。」(通巻二一八号)と

繰り返されている。当該分野に関わる研究者はこれまで以上に体系化・理論化の問題を意識し、語から語彙へ、そして、さらにその変遷を明らかにしようとする研究を目指すことを期待したい。」(村田菜穂子、二〇〇八)

このような状況は20年以上前から続いている。本稿執筆者も安部、一九八八の「語彙」の学会展望で、

○「語から分野別語彙へ、さらにその変遷へと、より大きな語彙の変遷を明らかにする方向を意識した論が増えてきてはいるが、何らかの形で体系化を模索するような総論を期待したい。」

と述べた。現在でも、研究全体の理論的な検討が求められている。「語彙」を共時的に扱った講座や概説書はあつても「語彙史」を網羅的に概説したものがまだ編まれていないことにも語彙史研究の現状が反映されている。

本稿では、繰り返し必要性が説かれている語彙研究、語彙史研究の課題について、特に、「語彙的カテゴリー」「中和・反作用・反現象」「部分語彙の特性」の諸点について、次の構成で論じてみたいと思う。

第2章 「語彙的カテゴリー」の確立と整理と体系化

第3章 語彙の史的特徴からみた語彙史上の特徴と研究課題

第4章 語彙と部分語彙の関係から見た語彙の特徴と研究課題

なお、語彙に関する術語的な点を確認しておけば、「語彙」は次

のように定義される。

「語彙とは、ある特定の言語、特定の集団、地域、作品、人における言語のように、対象を定めた上で、そこに現れる見出し語を集めたもの、すなわち見出し語の集合をいう。」『国語学大辞典』(樺島忠夫)

また、その語彙の要素、つまり、語彙研究の単位となるのは語(単語)である。

「語彙は集合であり、語は集合の要素である。」(同右)
「あるまとまりを持った語の群れのことを、一般に「語彙」という。(略)語彙を形づくっている一つ一つの語は、「単語」または「語」と呼ばれる。」(田中章夫、一九七八)

その語彙と、その要素である語との関係については、次のようにとらえられてきた。

「語彙は常に各要素が張り合つてゐる統一体である。」(泉井久之助、一九三五)

語彙の要素である、1語1語が、何らかの観点において、「張り合い」をもって、全体が1つの「統一体」を成している、と把握することができる。その「張り合い」方、および、「統一体」の構成に見られる構造が、言語の体系の一部を構成するものとしての「語彙の体系」と考えられてきたものである。

言語の体系における各々の側面である文法の体系、音韻の体系と同様に、語彙の中に認められる「体系」性を説明していくことが、

「語彙研究」の目的である。語彙研究における様々な考え方、つまり、理論・方法論が「語彙論」であり、語彙の歴史的研究分野が、「語彙史研究」である。

第2章 語彙史研究史から見た「語彙的カテゴリー」

まず、「個々の研究者の知見がばらばらに提出されてきた観がある」(湯浅茂雄、二〇〇二)という指摘に鑑み、語彙史研究の諸分野を体系化することを考えてみたい。そのために、主要な研究分野を「語彙的カテゴリー」という観点から整理し、それぞれの特性と「単位」という観点から相互の関連性を明らかにして、研究分野全体の有機的関連性を解明して、体系的に位置付けてみたいと思う。

その前段階として、従来の研究を概観して、現時点における主要な研究分野を把握することから始めていくことにする。なぜなら、音韻・文法に比べて、語彙研究の諸領域相互の位置付けや、それらに関する共通理解が必ずしも十分ではないからである。

語彙史研究における研究分野の分類を検討するには、研究史を概観するのが早い。以下ではまず、このほぼ40年間における語彙・語彙史研究の講座類を取り上げ、「語彙史」研究が共通して取り上げてきた研究観点と分析法とを確認してみたい。その後、それら相互の位置付けを検討していくことにする。講座類は、特に、その時点における当該分野の研究領域を網羅し優先順位の高い研究テーマに

よって構成されているので、研究史を把握するのに適しているからである。

(1) 『講座国語史3 語彙史』(一九七二、大修館)

「語彙史」としてまとめられた最初の講座に『講座国語史3 語彙史』(一九七二、大修館)がある。語彙史研究がようやく本格的になり始めた初期のものであり、各時代毎の担当者によって記述方針が異なっていた。前田富祺、二〇〇二では、次のように評している。

「時代に分けてそれぞれの時代を異なる執筆者が分担し、その時代の語彙の特色をまとめたものである。執筆者によって語彙に対する考え方が異なるので、全体として一つの語彙史としてまとまっているとはいえない。」

まだ時代を通じての統一的記述にはなっておらず、「史」に至っていないことは目次にも現れている。目次は、時代毎に細かいので紙幅の都合で掲載を略するが、「語彙史の方法」と「辞書の歴史」の章以外に、上代、中古、中世、近世、現代に相当する第2章から第6章まで5つの時代に分かれる。この5つの時代全てに共通する語彙の分析観点(分野や用語)を目次内に探しても共通するものが1つも無いという段階であった。「語種」「漢語」「語構成」「語彙量」「計量」という、現在の研究では共通して見られるような術語を探しても、4つの章(時代)に共通するものすらない(ただし実際には、例えば「漢語」に関する内容は、「仏教語」や「学術用語」

という見出しのもとにいわば個別的具體例として間接的に取り上げられてはいる。現在からは考え難いところがあるが、それが語彙史研究のスタート地点であった。見出しの術語上でも、「語彙」を通史的に見る共通する分類や観点（それらは言わば研究の枠組み、パラダイムとも言えるものであろうが）が確立していない段階であった。そのことよりもむしろ、当時としては、講座で「文法史」「音韻史」の巻と並んで「語彙史」が登場した意義が大きかった。通時的に統一した視点から記述できるような共通の研究基盤をもつ必要がある。

(2) 『岩波講座日本語 9 語彙と意味』一九七七

次に現れる「語彙史」が冠せられた講座は、『講座日本語学4語彙史』（森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編、明治書院、一九八二）であるが、その前に、『岩波講座日本語9語彙と意味』（一九七七、岩波書店）と、田中章夫一九七八『国語語彙論』（一九七八、明治書院）を見ておきたい。これらは前記（1）の講座の数年後、今から30年程前になる。特に現代語の共時的研究所と理論を中心にまとめられているため、目次には「語彙史」という名称がないだけでなく、そこでの理論や現代語での研究が史的研究所とどのようにつながるのかについても、ごく部分的に取り上げられるにとどまる。「語彙史」研究がまだ日が浅いことを感じさせる。

さて、『岩波講座日本語』は、当時の「日本語学」の水準の最先

端と全容をわかりやすく提示して非常に評価が高かった。『9語彙と意味』の巻は、目次を次に挙げるように、語彙体系、計量的研究、基礎語彙、意味、語史、造語法、辞書（これは通史）はあっても、まだ、各章での史的記載は少なく、語彙史までには展開していなかったことがわかる。（目次の見出しの下のカッコ書きは、対象となっている研究領域を便宜的に分類してみたものである。）

- 「1 語彙の体系」 (理論)
- 「2 語彙の量的構造」 (計量的研究)
- 「3 基本語彙・基礎語彙」 (基礎語彙論・計量的研究)
- 「4 語彙の変遷」 (語彙史)
- 「5 意味の体系と分析」 (意味)
- 「6 意味の変遷」 (意味、語史)
- 「7 造語法」 (語形成)
- 「8 日本語の辞書(1)」 (辞書の歴史)
- 「9 日本語の辞書(2)」 (辞書の歴史)
- 「10 語彙研究の歴史」 (研究史、国語研究所の近現代語研究が中心で、古典は約5頁のみ)

ここでは「辞書」に2章を割き、語彙史に関するものは、「4語彙の変遷」(前田富祺氏執筆)と研究史の「10 語彙研究の歴史」(古典は約5頁)のみである(その前田氏の章は、当時前田氏が集中的に研究を推進されていた「意味分野を限った語彙の変遷の研究」

(第2節題名)に焦点が当てられている)。前期(1)の講座『語彙史』と同じく、辞書の史的研習自体が語彙史研究でもあった時代である。また、当時の意味論ブームもあって、巻が「語彙と意味」であり、章題にも「語彙の体系」のほか「意味の体系」もあり、また「意味の変遷」のように語意変遷などの語史研究など、意味研究の比重も高かった。

また、語彙の巻が、現代語中心となっているのは、必ずしも全巻的企画意図でないのは、「文法」「音韻」「文字」「文体」と比較するとわかる。例えば、文法2巻のうち、「文法I」は研究史以外は確かに理論中心であるが、助詞・助動詞を扱う「文法II」は歴史的研究が中心である。「音韻」では「音韻の変遷」という史的研究が3章立てで、「アクセントの変遷」と併せれば4つの章が歴史的研究である。「文字」「文体」もむしろ歴史的な研究が半分を超えている。「語彙史」という史的研究自体が、他の分野の史的研究に比べてかなり遅れていて、始まったばかりであったことが現れている。

(3) 田中章夫一九七八『国語語彙論』

『岩波講座』と同時期の田中章夫一九七八『国語語彙論』は現代語が中心であるが、当時の研究が網羅されているので取り上げる(目次構成は以下の通りで、括弧内は同上の便宜的分類で、以下同じ)。近現代語を対象としているので、上代以降の通時的な「語彙史」的研究は、「第十章 語彙の変化」内の「三 史的変遷」「四

語源と語史」で触れられる程度である。その「三 史的変遷」では、上代以降を対象とする「語彙史」的研究としては、国立国語研究所の語彙研究(と大野晋)の紹介である(その点では「第7章 語彙の量的構成」における史的研究も同様である)。

第一章 語彙と語彙論 (研究史と理論)

第二章 語の体系と構造 (意味、シソーラス)

第三章 語彙の計量 (計量的研究)

第四章 語彙量と基本語彙 (計量的研究、基礎語彙・基本語彙)

第五章 語彙の類型と対応 (意味、形態、語構成、語種)

第六章 語彙の分類 (意味、語種、文法機能、語構成)

第七章 語彙の量的構造 (計量的研究、意味、品詞、語種、

形態)

第八章 語彙の様相 (文体)

第九章 語彙の位相差 (位相)

第十章 語彙の変化 (意味変化、方言(位相的多様性)、

語史、歴史的観点)

第十一章 語彙の膨張と整理 (歴史的観点、文化的問題ほか)

第十二章 国語語彙の特徴

前後の他の「語彙史」の講座に比べても、非常に広い視点から研究領域が取り上げられている。内容が計量的研究に関するものが多いのは、著者が国語研究所に所属していたこととも関係する。一方、一部の章の内容は(五、六、八、十章)、章と節の題名のみからは、

取り上げられている具体的研究領域やその対象が何なのかがわかりにくい。後述の一九八〇年代以降のものや齊藤二〇〇二と比較するとその相違がよくわかる。語彙研究と意味論的観点からの研究とが混在していた段階であることや、理論的な整備がまだ一般化していない様子がうかがえる。

これら(2)(3)からは、理論的研究や、現代語の共時的研究での成果が、歴史的研究と関連させて論じられるということが、まだ少なかつたことがわかる。

(4) 森岡健二ほか編一九八二『講座日本語4語彙史』

森岡健二ほか編一九八二『講座日本語4語彙史』は、約30年前に「語彙史」を冠した講座である。通史よりも、編集意図にも明記されているように、現代語に焦点が当てられている。

『現代日本語を日本語の歴史の中の現実として見なおす』という本講座の趣旨を受けて、この巻は、現代日本語の語彙を、日本語の歴史の中でとらえることを意図した。(あとがき)

目次からわかるように、取り上げられている分野は、整理すれば「語種」と「意味分野別」のほぼ2分野のみである。

語彙の歴史の中の現代語彙

和語の意味変化

漢語の変遷

和製漢語の歴史

外来語の歴史

親族語彙の歴史

身体語彙の歴史

色彩語彙の歴史

言語行動語彙の歴史

感覚・感情語彙の歴史

象徴語彙の歴史

最後の章の「象徴語彙の歴史」は、意味分野でもあるが形態にも関わるので、この一章を除けば、語種と意味との2つの観点での語彙史である。当時、通史的な研究として提示できる内容が整っていない領域が極めて限定されていたことがわかる。研究史の中で見れば、語彙史として比較的蓄積があつて通史が描きやすかつたのが「語種」と、親族・身体・色彩・オノマトペという、文化人類学・言語学など、語彙史に限らず研究蓄積のあつた意味分野の研究と、そして、日本独自の研究ジャンルともいえる「言語生活」と関わらせて論じられている「言語行動」であつたことがわかる。「あとがき」には「語種」と「生活語彙」の2つを対象としたとある。

「考察の対象とした語彙史の問題は二つである。1つは、和語・漢語・外来語の各語種が日本語に果たしている役割と特質の歴史であり、もう一つは、親族、身体、色彩、言語行動、感覚・感情、象徴といった日本人の生活と文化に密着した生活語彙の歴史である。」(あとがき)

「生活語彙」という取り上げ方に、社会言語学研究が全面的に展開するようになる以前の、当時位まで盛んであった伝統的「言語生活」研究の名残を留める構成になっている(雑誌『言語生活』の最終刊は、この講座の6年後の一九八八年三月)。当時特に研究が進んでいた分野として、意味および語種が重視されていたことがわかる。

(5) 佐藤喜代治編一九八一〜一九八三『講座日本語の語彙 全11巻別巻別巻1』明治書院

「語彙史」研究が変化し、飛躍的にその領域が拡大する転機となったのは、おそらく、佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 全11巻別巻1』(一九八一〜一九八三、明治書院)であろう。そのことは、この前後における語彙史研究書やテキスト類での語彙のカテゴリーの取り上げられ方を比較すると明らかである。

「語彙」のみで、講座もので各時代毎の研究も含めた12巻にも及ぶという構成は、大きな影響力をもった。その構成には、編集委員でもあった前田富祺『国語語彙史研究』(一九八五、明治書院)の影響も少なくなかったと思われる。

前田富祺『国語語彙史研究』(一九八五、明治書院)は、意味分野を限定しての語彙史研究であり、語種研究、計量的研究、言語生活活の語彙中心だった当時に、新しく領域を拡大させたものであった。その著書にまとめられるまでの一連の研究が、その後の、意味分野

研究を大きく展開させる原動力となっていることは、その後の研究史からも明らかである。その語彙史研究の理論や方法は、氏が編集に関わった『講座日本語の語彙』にも投影している(構成と目次参照)。

『講座日本語の語彙 全11巻別巻1』後の、語彙研究、語彙史の研究書・概説書の目次や構成を、それ以前のものと比較すれば、その影響力の大きさは明白である。本講座は、それ以前の研究が、上述の『講座日本語学』のように比較的限られたジャンルの研究に片寄っていたのに対して、その後の語彙(史)研究の領域を、飛躍的に拡大させていく大きな転機になっていったことがわかる。

第1巻語彙原論

語彙	(理論)
語形・語構成	(語形、語構成)
語義	(意味)
語感	(意味、文体ほか)
語源	(語史)
語の変化	(語形の変化、意味の変化)
位相論	(位相)
幼児語	(位相)
固有名詞	(名称学、品詞)
語彙の体系	(理論、意味)
語彙の計量	(計量的方法)

第2巻日本語の
語彙の特色

基本語彙	(文字、漢語、語構成)
語彙と文法	(文法機能、品詞)
語彙と文体	(文体)
辞書	(シソーラス、語彙表、辞書研究)
日本文化と日本語の語彙	(文化)
日本語の系統と語彙	(出自、語源、語史)
日本語の社会階層と語彙	(位相)
日本の社会における場面と語彙	(文体、位相、社会、品詞、語種ほか)
日本人の言語行動と語彙	(文化、社会)
日本語の語彙の構造	(意味)
和語の性格と特色	(語種)
漢語・外来語の性格と特色	(語種)
日本語の語彙の表記	(文字・表記)
日本語の語彙と中国語の語彙	(対照言語学的視点。以下の章は、同様に、朝鮮語、東南アジア言語、中近東社会の言語、英語、西欧諸言語の語彙との比較であるが、語彙研究の方法論的ジャンルというより、対照言語学的語彙研究であるので、割愛する。)

右に第1・2巻の各見出しの下に、括弧書きで語彙研究上の分野を記してみた。これら、第1巻、第2巻以外の、「古代の語彙」「中世の語彙」「近世の語彙」「現代の語彙」にも様々な観点から語彙の多様な研究が取り上げられている。それらの詳しい目次は省略するが、章ごとの見出しの立て方に、まだ統一性がないとは言え、そこには共通して取り上げられる観点が自ずと明らかとなっていて、一定の共通した語彙的カテゴリーが出来上がりつつあったことが浮かび上がってくる。それは、通時的か共時的かという観点は別とすれば、次のようなものである。

意味、形態、語構成、文字表記、語種、位相、文体、文法機能(品詞)、計量的方法、辞書研究、語史・語誌的研究(語源・系統を含める)

当時の多くの語彙研究者による執筆によって、多様な考え方が一覧できて、当時の「語彙」のイメージの全容が共有され、それは自ずと、主要で重要な領域がどこかということへの共通理解へと結びついていった感がある。

(6) 玉村文郎編一九八九・一九九〇『講座日本語と日本語教育
第6巻第7巻日本語の語彙・意味(上・下)』明治書院

(5) の佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 全11巻別巻1』の講座の少し後、一九八九・一九九〇年に、玉村文郎編一九八九・一九九〇『講座日本語と日本語教育 第6巻第7巻日本語の語彙・意味

（上・下）』が刊行された（目次は節末参照。カッコ内は参考までの分野分類）。書名からもわかるように、○日本語教育を主な目的としていること、○そのため「意味」とその教育や指導にも重点が置かれていること、などがあり、他の「語彙」を中心とした講座とは異なる部分がある。その点を考慮してみておくことにする。

他の講座と比較すると、意味論関係の章立て（類義語・反義語、同音語・多義語、定義・命名、語義変化、比喩・発想法など）が多いこと以外には、次の点が指摘できる。①文法機能・品詞等と語彙との問題がない、②文体と語彙との問題がない（短歌・俳句があり、文化・文学教育に関わるものに限定されている）、③文字と語彙はまだない、④「語感」というやや広い基準がある（「語感」は後掲の齊藤倫明二〇〇二では「語義の構造」内の節に「意味」の問題として含む）、などである。齊藤二〇〇二の構成とはまだ一時代的相違が残る。一方、本講座自体は「意味」もテーマではあるので意味論関係が多いが、その点を別と見ても、これまでの「語彙」（語の集合）の研究には、「意味論」プロパーの問題との混在ないし混乱があることも見えてくる。

このような目次だけでの比較は、瑣末な視点であるが、問題視されている「理論」の必要性には、このような主要な研究カテゴリー自体の議論も含まれていよう。ともあれ、後述のように齊藤倫明二〇〇二が、研究史的に、主要範疇における共通理解の確立を画期することが、対照的に浮び上がってくる。

第6巻（上）——語彙総論、語形（形態）、和語（語種）、漢語（語種）、外来語（語種）、語彙の計量（計量的研究）、基本語・基礎語（計量的研究、基礎語彙論）、語構成（語構成）、語の意味（意味）、類義語・多義語（意味）、同音語・多義語（意味）、語感（意味ほか）、定義・命名（意味ほか）、語義の変化（意味、史的研究）、新語・流行語（史的研究ほか）

第7巻（下）——日本語と英語の語彙の対照、日本語とスペイン語の語彙の対照、日本語と中国語の語彙の対照、日本語と朝鮮語の語彙の対照、教育基本語（基礎語彙論）、擬音語・擬態語（意味、形態）、辞書、短歌・俳句の用語（文体）、術語・専門語（位相）、連語・慣用語（形態、語構成ほか）、比喩と発想法（意味、文体）、意味分野（意味、シソーラス）、語の位相（位相）、語彙指導（教育学）、日本文化と語彙（文化）、

（7）語彙・語彙史研究の主要領域——安部清哉一九八五

研究史のごく一部ではあるが、研究観点の変遷を概観できるものをたどってみた。その中でも、佐藤喜代治編一九八一〜八三の講座からは、研究の主要な観点がほぼ一定して扱われるようになっていくことを見出すことができる。

そのような時期に、本稿執筆後も安部一九八五で、語彙研究のジャンルを次のように分類し体系化を試みたことがある。これらの直後に当たる時期で、これらの大規模な講座や前田富祺氏などの一連

の研究に導かれての試論であった。次に、その語彙研究ジャンルを整理分類した部分のみを示す。

「語彙の研究は、大きくとらえて次の四つの観点から整理することができる。

(1) 語の処理の仕方——計量的分析・体系的分析

(2) 歴史的な観点

(3) 語の性格 (i) 内的性格 (意味・形態・文法機能・

語構成・語種)

(4) 語の性格 (ii) 外的性格 (位相・文体)」

「(2) 歴史的観点」としたのは、共時的・通時的研究の相違のことであり、語彙史に限らないのでここでは除外しておく。

「語の内的性格」は「語それ自体が持っている属性概念」で、「語の(a) 狭義の意味・用法、(b) 形態、(c) 文法機能、(d) 語構成、(e) 語種」の5つである。「語の外的性格」としたのは、単語それ自体がもって特性ではなく、社会的属性や使用場面、表現される時の形式(文体など)、さらに時代的なイメージや文化的概念範疇によつて後付で性格付けされる側面を指し、「広義の位相」として文体と位相を含めたものであった。

「内的性格としてあげたものは、語それ自体が既に本質的に持っているものである。」

「外的性格としたのは、その語が使われる場面・状況・表現形式などの環境によつて語が持つようになる性格である。」

これらは、一つの語に多重的に重層的に加わっていると考えた。

「このようにいくつかの内的要素から語が考えられるのは、日本語自体がこうした多面的性格を持っているからである。それゆえ、語の位置付けにおいては(略) 内的要素の一部のみによつてなされるのではなく、全てが多重に関わってくる。」

また、「計量的分析」と「体系的分析」は、それぞれ、後述する田中章夫一九七八における「語の集まり方」と「語のまとまり方」を踏まえたとらえ方であった。特に後者の「体系的分析」は、一語毎の「意味・用法」とは別に、語彙全体を「体系的・組織的な統一」と見なし、意味の観点から「語彙の体系的組織的關係を明らかにする」方法を指したものであった。そこで取り上げた語彙的カテゴリーをいま、羅列すれば以下のようになる。

意味、形態、文法機能、語種、語構成、位相・文体、計量的分析方法、体系的分析方法(まとまりとしての意味的分類)

拙論は、従来の研究観点を網羅できるよう体系化してみたものであり、自ずと直前に刊行された佐藤喜代治講座の各巻各章で取り上げられた観点との共通性が高いものとなっている。ただ、現時点の執筆者の観点からすれば、「文字」と「文化」という視点が欠落している。当時としては、「文字・表記と語彙」という観点は、『講座日本語の語彙』第2巻に「日本語の語彙の表記」という1章はあるものの、全体の中ではまだ盛んではなかったことが投影している。

語彙的カテゴリーに関する拙論の体系的分類は、その後の理論的

研究に影響したようにも見えなかった。しかし、その後20年の間に、そこで示した主要な「語彙のカテゴリー」は、次に見る最新の講座の構成にほぼ同じかたちで定着するに至っている。

(8) 最新の講座からみる語彙的カテゴリー (斉藤倫明二〇〇二)

最新の語彙論・語彙史関係の講座に、斉藤倫明編二〇〇二『朝倉日本語講座』がある。その目次は、安部一九八五や先に挙げた主要な観点とほぼ同じものによって構成されていることが見て取れる(第12章の「語彙研究史」内の構成にも一部に同様の分類が見られる)。

- 第1章 語彙研究の諸相 (理論)
- 第2章 語彙の量的研究 (計量的研究)
- 第3章 意味の体系 (語彙・意味の体系性)
- 第4章 語種 (語種)
- 第5章 語構成原論 (語構成)
- 第6章 位相と位相語 (位相)
- 第7章 語義の構造 (意味)
- 第8章 語彙と文法 (文法機能、特に句・文との関わりに限定されているが)
- 第9章 語彙と文章 (文体・文章)
- 第10章 対照語彙論 (対照言語学的研究)
- 第11章 語彙史 (通時的に見る研究)

第12章 語彙研究史 (研究方法と研究史の概観)

- (1) 「語彙」の用語
- (2) 語彙とは何か、語彙の要素
- 3 語彙における体系と集合 (体系と集合、集まりとまとまり)
- 4 戦前の語彙調査(理解語彙・国語教科書の語彙調査・基本語彙) (基本語彙)
- 5 語彙の計量的研究 (計量的研究)
- 6 意味の側面からの語彙研究 (意味)
- 7 語種の構造 (語種)
- 8 品詞別構成の研究 (文法機能・品詞)
- 9 語構成論 (語構成)
- 10 国語辞典 (辞典、語彙分類・シソーラスに関連する項目)

この講座が、安部一九八五とほぼ同様の語彙的カテゴリーによる章の構成ということは、この20年間において一定の共通理解が定着してきたことを示すと言えよう。それゆえ、これらでの分類を語彙史における主要な「語彙的カテゴリー」と位置付けておくことができるように思われる。

なお、そこには「文字」と「文化」が、安部一九八五とまだ同様に見られない。この2点は、今日的には、語彙との新たな関係をつくってきているので、語彙的カテゴリーとして、追加して考えてい

表1 語彙的カテゴリーとその体系化

(安部二〇〇九参照)

語彙的カテゴリー	単位の大小 (個別<類別集合<総体)					例示: 語の語彙的諸相
単位	最小・個別⇒	⇒類I⇒	⇒類II⇒	⇒最大・総体		
単位内の1語	(意味・形態では、他とは異質の1単位)	分類単位での集合体 (集まり) (例、和語+漢語+外来語=語種) (類内では同質扱い)		異質的要素としての集合体 (集まり)	同質的要素としての集合体 (集まり)	「アカイ」
意味	1単語単位 (1単語毎の個別属性)					〈赤色〉 (色彩基本語彙4語の1つ)
形態						[akai] (明け・朱け・灯り・明かすなどの関連語あり)
語種		類としての単位I (単語内的属性)				和語
語構成						単純語
文法機能						形容詞
文字						カタカナ表記語
位相			類としての単位II (単語外的属性) = 「使用環境」 (表現形式、使用者所属、文化的概念範疇、時代、使用環境の1つとしての資料)			(無標)
文体						(無標)
文化						《情熱・危機》
意味体系よる位置付け (ソーラス・類義語辞典・意味体系表)	(「統合的総体」内での1語の位置付け)				「統合的総体」単位 (全体で1単位)	相の類-自然-色 (35020)
計量的方法による位置付け	(「集合的総体」内での1語の位置付け)				「集合的総体」単位 (全体で1単位)	現代雑誌90種では上位1000語中の上代からの基礎語彙の1つ

くことを提唱したい(安部二〇〇九参照)

意味、形態、語種、語構成、文法機能、文字、位相、文体、文化、計量的分析方法、意味体系的分析方法(まとめりとしての

意味的分類・シソーラス研究)

この20年間における主要な「語彙のカテゴリ」が一定してきたのは、それだけ語彙研究の考え方が共有され、研究が内容の充実へと向かう深化期に入ったことを示す。これらが語彙史研究において相互にどのような関係性を形作っているかを考えることは、「語彙の体系」をどのように考えていくかに密接に関わってくる重要な課題であるが、それについては、安部二〇〇九を参照されたい。

本章では、従来の語彙史研究の課題を踏まえ、語彙史研究史と主要な研究分野とを確認して、語彙の研究領域でもある語彙の研究パラダイム(理論的枠組み)として、11の「語彙のカテゴリ」を設定してみた。なお、それを体系的に整理したのが表1である(詳しくは、安部二〇〇九の二つの拙論を参照されたい)。その解釈は今後の議論が必要であろうが、新たに加えた「文字」「文化」を別とすれば、このほぼ20年間安定しているもので、語彙研究の世界に定着している研究フィールドと見なしてよいものであった。

以上、「語彙史」を考えるために、これまでの「語彙(史)」研究を、語彙の分類基準や単位、方法から整理し、体系化してとらえておく必要があると考え、語彙研究における現時点での「語彙のカテゴリ」を整理してみた。

第3章 語彙の特徴から見た語彙史研究の課題

3-1 語彙の特徴から見る「語彙体系の特徴」と研究課題

まず、これまでの研究で「語彙」の史的特徴と考えられてきた点を再検討し、そこに見られる課題を再構成することからはじめてみたい。課題として指摘されてきている語彙・語彙史研究の理論的問題を考えるためには、従来の研究の基礎的部分を再検討し、そこで見落とされている問題を見つけ出して、その問題がもつ意味を見直していく必要があると思われるからである。

さて、「語彙の体系」というのは、いわば研究上の抽象概念である。その特徴は、語彙自体の中に言わば隠れているものであり、理論や方法論など、広い意味でその研究領域での概念構成(理論的研究体系)にしたがって、整合性のあるものとして「取り出して」いくものである。あえて「比喩的に言えば」、名付けによって外界が把握されるのと同じように、体系的組織というものは理論の鏡像でもある。

それゆえ、その「語彙の体系」は、当然ながら、「語彙」を、われわれが、語彙にふさわしい何らかの観点(複数)から分類していく時に、まず第一に、分類していく観点相互がもっている関連性そのものの、つまり分類観点の構造・仕組みと無関係ではない。また、何らかの分析観点(複数)から分析された結果、語彙それ自体の特

徴と見なされ得たものと無関係でないはずである。つまり、より語彙にふさわしいやり方で行われた場合、①分類観点そのものの独自性に、あるいはまた、②「語彙」の特徴そのものの中に、「語彙の体系」の特有の性質が、投影していると考えることができる。語彙そのもののさまざまな特徴を、十全にあますところなく明らかにできる分析観点と方法を理論的に整え、それによって語彙の特徴を明らかにできたとき、その理論と諸特徴がすなわち所謂語彙の体系を映し出しているものと考えることができる。

理論の完成度は、研究対象の実像の解析度と、言わばパラレルである。語彙の体系は、現在明らかにされてきている「語彙の特徴」と、そこでまだ解明されていない部分とに、投影されていると見ることができると。「語彙の特徴」をまず再検討し、そこで見落とされている語彙の特徴の裏側、あるいは、見落とされていた語彙研究の視点を、まずは、探り起こしてみる必要がある。

そのような逆説的な考え方は、鏡の裏側から見ると立って、語彙の特徴を再検討したときに、語彙の特徴とその研究上の課題として、次の点が見出せる。

- 1 死語、古語、廃語など、消えていく語彙の質的量的位置付け（意味体系的・計量的）（増加していく語との相關関係）
- 2 弁別基準としての機能を、失ったり弱めたりしていく語彙分類のカテゴリーの消滅とその位置付け（語彙的分類カテゴリー

の増加との相關関係）

- 3 語の形態、あるいは、文字表記形式が短くなった形式が、現れることとそれらの位置付け（多音節化、複合語などの増加との相關関係）

これらの現象は、語彙の研究としては——語史・語誌などや、一部の現象としては触れられることもあったが——これまでほとんど取り上げられてこなかった。少なくとも、語彙研究の主要な各種のテーマと同程度の重要なテーマとは、認知されてこなかったものである（後述するごく少ない先行研究での言及や、部分的な論がある程度である）。

「語彙」研究としてのこれらの課題は、先のような思考法により、各々次の「語彙の特徴」の「鏡像」として、映し出される問題である。以下の諸点は、語彙の特徴として、おそらくもつとも一般的に指摘できる、共通理解となつていっているといつてもよい——しかし明記されることが多くはない——「語彙史」上の特徴でもある。（3'は音韻の方で挙げられることが多い）。

- 1' 語彙の要素である単語の増加
- 2' 語彙のさまざまな類型の増加（例えば以下のもの）
 - ア 語種の増加（漢語、外来語等が加わり、それぞれ増大する）
 - イ 文体差による語彙の増加（和文語、漢文訓読語、記録語、

口語、俗語など)

ウ 位相差による位相語の増加(古語、歌語、方言、女房詞、階層差、若者詞など)

エ 漢語の字音別による種類の増加(呉音、漢音、唐宋音、慣用音など)

3' 語の単位の長単位化(多音節語化、複合語増加)

確かに、1に関わる「死語」「廃語」の研究や、3に関する「略語」「縮約」などの規則に関する研究などはあるが、それらと正反對の現象にあたる、増加していく語彙、重要度が増していく語彙、多音節化・長音節化した語彙、複合語などの現象に比べて、初めにあげた諸点の重要さはほとんど認識されてこなかった。また、表裏一体のものとして、それらの間での相関関係や影響関係を考察することはなかった。また、これらプラス方向の現象(ダッシュを付した後掲3点)とマイナス方向の現象(前掲の3点)とを、語彙的視点から「語彙の体系内での平衡性に関わる現象」と考える視点もなかった。

しかし、「語彙史上の特徴」として列挙した諸点は、初めに研究課題として挙げた3点と表裏一体をなしている。後掲の諸点が、語彙研究上、語彙体系の把握においても、重要な研究テーマであるということは、その裏側にある鏡像側、あるいは「反現象」「反作用」とでも比喩的に呼べる最初に挙げた諸現象の方も、実は同じように、

語彙の史的变化の現象に潜む重要な問題であるはずである。

これまででは、目に見える現象、言わば「出現してくる現象」にばかり目を奪われ、~~後退~~ないし~~消滅~~していくような局面にある現象と、それがもつ歴史の意味について、ほとんど検討してこなかったように思われる。

右の3点以外に他にも、同様の視点から、「反現象」「反作用」的な現象に関する研究課題が指摘できる。以下では、上記に提示した観点がどのような点で、研究課題であるか、ということをやより具体的に検討してみることにはしたい。

3-2 語彙史現象におけるプラス現象とマイナス現象——「反現象」「反作用」「中和」——

最初に挙げた1・2・3の3つの課題は、語彙の史的特徴と考えられる後掲の3点を、反対の側から考えてみたものである。その語彙の史的特徴自体も、これまで明示的に列挙されることは特になかったように思われる。「語彙史」の課題としては、このような基礎的問題であつても、共通の研究基盤を築いていくためにも、明示的に記述していく必要がある。(う)

さて、列挙した語彙史の特徴3点に共通しているのは、語あるいは語彙そのものの増大、および、語を区別する範疇の増加である。それは、語にせよ、分類単位にせよ、一定の語彙全体にせよ、要するに、語彙的カテゴリー上の「単位」の増加という問題である。

しかし、増加ばかりに着目した解釈は、人間の記憶量や記憶の経済効率、言語情報処理能力から考えて明らかに不自然であり、一面的に偏っている。音韻において、「機能負担量」のような記憶的経済効率が言われるように、記憶に負担をかける情報の増加・増大のバランスをとるためには、一方で、何らかの負担軽減のメカニズムが働いているはずであり、そのように解釈するのが自然である。増加現象の背後に、その反対の現象が存在しているはずであり、それと同じく「語彙の問題」であるはずである。ところが、これまでは、そのような語彙変化における収支バランスという視点が欠落していたように思われる。そのような、一つの現象に対する、言わば「反現象」「反作用」的側面はあまり注目されてこなかった。ここでは、語彙史の特徴と表裏一体と考えられる前掲の3点の課題について、少し検討してみることにはしたい。

3-2-1 (1) 語彙の増加と減少 (古語化、死語化、消滅)

まず、「①語彙の要素である単語の増加」について取り上げる。上代や中古に比べて、語彙は次第に増大してきた、と大局的にとらえることができる。(もちろん、古典では残っている資料の問題などがあり単純ではない。各時代の全語彙や、一人の理解語彙全体を確認することも実質的に不可能である。近代以降なら辞書の全語彙を比較するという方法もある程度意味があろうが、編纂方針によつて見出し語は大きく変化する。語彙全体の増減を把握できるかとい

う問題は、「消滅した」語彙の判断と同様に厳密には困難が多い。)

現代人も、日々の情報の中で語彙を増加させている。しかし、単純な増加をすべて維持する必要はないから、一方で不要の記憶を軽減・消去しているのが実態であろう。それは社会全体の語彙使用でも同様のはずである。現実社会の中では、辞書や何らかの資料の中に過去の記録として保存されたり、また、高齢層によつて記憶され維持されるということはあつても、実社会の中では不要な語彙は、使用頻度が下がったり、いわゆる「死語・廃語・古語」化したりして、消滅していく。増加に目を向けると同時に「減少」の側面にも、解明しなければならぬ問題があるはずである。そのようなプラス・マイナスの両面があつての語彙現象である、という解釈があまりなされてこなかった。

音韻・文法においても、増加や減少(出現と消滅)の歴史的变化があり、そのプラス・マイナスの変化の両面の比較が行われることによつて、音韻史・文法史の解釈が行われてきている。そのことと比較すると、これまでの語彙の史的研究における問題の一つは、増加という現象の前後における相違を比較する視点が希薄だったということがわかる(もちろん、正確な実態が調査しにくいという方法上の問題はあるが、それは理論的なことはまた別次元の問題である)。

音韻・文法のようには史的变化の研究が行われてこなかった理由として、語彙では増加と減少、出現と消滅のサイクルが、音韻・文

法に比べて早い、という特徴があることを挙げることができよう。比較的短期間に出現と消滅（衰退）を繰り返す個々の多くの単語をいちいち把握し、それらを語彙全体の中で位置付けていくことが容易でない（方法的に難しい）という面も、一方では確かにある。

しかし、そのような、語彙における部分的語彙の入れ替わりのサイクルの短さも、実は、音韻・文法とは異なった語彙史における特徴を形作っていると位置付けられる。

1' 語彙の要素である単語は、歴史的に増大してきた。
4' 語彙の要素である単語（特に名詞）は、歴史的に増加する傾向があるが、一方、衰退・消滅していくものも多い。

5' さらに、音韻や文法と比べて、研究対象となる個々の要素の出現・増加、消滅・減少のサイクルは、語彙では、総体的に短いという傾向がある（品詞や語構成によって増減の傾向は異なる。その相違に関しては別に検討が必要である）。

また、そのような比較的短期間での入れ替わり（交替）を可能にしているのは、システム（体系）の相違であるから、これは、文法体系・音韻体系とは異なる語彙体系の特徴と位置付けることが可能であろう。

文法・音韻で短期間での変化が生じてしまうと、口頭語におけるコミュニケーションや、世代間などでの理解伝達に支障が生じる。文法体系・音韻体系において、例えば、語彙における交替での明治元年から昭和までの一〇〇年間における基礎的名詞の交替と同様の

変化（約3分の1が新しくなったとした場合＝宮島達夫一九六七資料より）が生じるようなことがあれば、世代間の言語的相違ははなはだしいものとなろう。それは内的変化というよりも、言語的上層語の交替など、言語システムそのものの変化に近い状況を推定させる。

6' 語彙は、音韻・文法に比べて、その単位（語彙の単位である語）や部分語彙の交換が、比較的容易に行われやすい構造をなしている。（単位である語や部分語彙の「合体型」体系という特性）

4'、5'、6'が可能であるためには、それを容易にしている構造（システム）があると考えられる。

そして、それを支えている特徴として、語彙における同義語・類義語関係にある新旧の語の併存期間の長さという点も、音韻・文法との相違と見なすことができる（古い言語事象の併存的残存は、音韻では少なく、文法では（文語と口語の併存を別とすれば）慣用句など部分的な存続に留まる）。

7' 語彙においては、新旧の関係にある言語事象の併存期間は、音韻や文法に比べて、多く、かつ、広範に及び、また、長期的な傾向をもつ。

いま挙げってきた諸点についての、より厳密な位置付けと解釈は、全時代を視野に入れた場合、より精密な検討が必要であろうが、大きくは語彙史の特徴といえることができよう。特に、4'、5'、7'は、語彙

体系の問題に関わり、使用頻度の低い語彙を含め、全体としては、語彙体系（の中での部分的語彙）の改編が、恒常的に繰り返されていると解釈できる。

この程度の問題なら、「あえて文字化するほどではない」と思われるかもしれない。しかし、次のような問題につながっていることを考える時、このような基礎的特徴であっても、これまで明文化したり、定式化させてこなかったことが、理論的研究の遅れとなった要因と思われる。

上記のように、新語と旧語の入れ替わりや増加・減少というメカニズムなどを、裏表両面の問題としてとらえることができるようになる、さらにそれらが新たな語彙体系上の課題としてうかびあがってくる。

○どのような語彙が増加しやすく、減少しやすいか。
○そのような語彙の交替には、どのような規則性があるか。

このように、現象の一面だけでなく、反対の現象と併せて表裏両面から考えていく必要がある。ここでは、語彙の体系に関わる理論的問題を検討するのが目的であるので、具体的に検討するのは機会を改めたい。（不十分ながら、一部の事例は基礎語彙史という観点から取り上げた安部二〇〇九参照Ⅱ補記）。

補記 安部二〇〇九の要点の一部を以下に紹介しておく。

現代雑誌九十種の上位一〇〇〇語を対象とし、その語彙の史的傾

向を語彙体系内の交替現象という観点から見た特徴として次の点を指摘できる。

ア 動詞・形容詞は交代の速度が緩やかであるのに対して、名詞は早く、比較的新しい時代の語彙を中心にして使用されている傾向がある。

イ 長期的期間で見た場合、日本語は、古くからある動詞（「はじめる」・形容詞（「うつくしい」・副詞（「すべて」）による語彙表現（語幹と活用語尾からなるような一体化した、旧来型の融合形式概念語）から、「漢語＋する」（「開始する」）「外来語＋する」（「スタートする」）や、「漢語＋だ」（「外来語＋だ」（「綺麗だ」・「ビューティフルだ」）や、「漢語＋に（と）」（「十分に」）「外来語＋に（と）」（「フル＋に」）、のように、「体言部分＋活用語」と言う形式での新型「複合形式概念語」としての動詞・形容語（形容動詞によるナ形容語・副詞の語彙表現に、徐々に移行し始めている）。

ウ これらのことは、時代の変化の早さに対応しやすいように、新概念に即応して交代させやすい「体言」（名詞）を中心とした表現機構（メカニズム）へと、日本語が（少なくとも、「総合雑誌」という文章表現における基礎的語彙部分が）、構造的な変化を始めている、と解釈される。つまり、語彙の主要部分である動詞・形容語・副詞が、次第に「体言」型語彙に移行していると見られる（文法上の変化でもある）。

表2 語彙における語彙的カテゴリーの「中和」現象（広義に解釈）

<p>音声に関わる「中和」現象</p> <ul style="list-style-type: none"> ○字音別語彙区別の中和——呉音読み語彙・漢音読み語彙（中世～近代）の混同、呉音と漢音の混在読み ← 字音語・漢語（漢音）の浸透 ○音・訓別の語彙の中和——和語・漢語の接近として見た湯桶読み・重箱読み ← 中世における漢語の一般化や和語の漢字音語化（おおね⇒大根）、和漢混交の影響とそれらの時期、また、近代における新漢語の増大とその時期 <p>語種に関わる「中和」現象</p> <ul style="list-style-type: none"> ○語種の中和（特に和語・漢語間）——和語・漢語・外来語の区別意識の希薄化 ← 和語の漢字書きの浸透と漢語の仮名書き化の影響など（例、ごはん、ヒコーキ、りんご、ラーメン等）、外来語と和語との中和も一部に生じてきている（ダブる、サボる、等） ○混種語の増加——語種意識の希薄化（直接的中和ではないが区別意識の希薄化と関わる。和語・漢語の混種語は近代以降、外来語との混種語の増加は現代か？） <p>文体に関わる「中和」現象</p> <ul style="list-style-type: none"> ○文体別語彙の中和——和文語・漢文訓読語・記録語の混在 ← 中世以降の和漢混交 ○話し言葉・書き言葉（文章語・口頭語）の中和——言文一致、現代における話し言葉の台頭、新言文一致（メール詞なども） <p>位相に関わる「中和」現象</p> <ul style="list-style-type: none"> ○標準語と方言との中和——方言・標準語共通語の混交や方言の共通語化など ← 言語政策の変化、方言の見直し ○性差語彙の中和——男言葉・女言葉の相違の減少 ← 男女平等思想・男女機会均等など

古代型日本語「とてもすばらしい日本古典文学を多く学ぶのがよ

い。」（屈折的）

←

近代型日本語「非常に魅力的な日本古典文学を沢山（十分に）学習

する事が大切です。」

「□□に□□な□□を□□φ（□□に）□□する□□

が□□です。」（□□||体言）（膠着的）

3-2-1 (2) 語彙的弁別カテゴリーの消滅——「中和」

次に、「②語彙のさまざまな類型の増加」について取り上げる。

一例として挙げた、ア語種の増加、イ文体別の語彙増加、ウ位相語の増加 エ字音別語彙の増加など、語彙の類型範疇は増加し、それぞれに所属する語彙も増加している。これまで、語彙的カテゴリーの下位的分類カテゴリーの増加にばかり注目してきた。

しかし、相違や区分が増幅するだけという一方向のみの変化は、記憶負担と、言語の経済効率から見ても不均衡で不自然である。ここでも、新たに生じる弁別範疇の増加の一方で、不要になり重要度の低くなった分類カテゴリーは、意味を失い消滅したり、新たな大きな範疇に統合されていくという反対の現象が生じていることが推定される。それによって、無用になった相違を維持する記憶負担量を軽減し、収支のバランスを担保していると推定される。

いま仮に、そのような分類カテゴリーの解消・改編を語彙的カテ

表3 語彙的カテゴリーの「中和」現象から見た語彙史

上代	古い外来語と和語との区別の中和【(例：馬、菊、紙(簡)、ふみ(文)、etc.)】
中古	呉音語・漢音語の区別の中和
中世	和文語・漢文訓読語・記録語の区別の中和 音・訓語の区別の中和＝「音訓混種語」【湯桶訓・重箱訓が盛んになる】
近世	ポルトガル語起源などの外来語との区別の中和(漢字表記・仮名表記による漢語化・和語化 (例：歌留多、襦袢、金平糖、合羽))
近代	呉音語・漢音語の中和が広がる。 和語と漢語の区別の中和が進む(例：りんご、ごはん)
現代	標準語語彙と方言語彙の区別の中和 外来語の和語・漢語との区別の中和(だぶる、さぼる、型録カタログ、イクラ、オクラ etc.) 外来語との混種語の増加(「ピーク時」「ボリューム感」 etc.)

ゴリーの「中和」現象と仮称しておく。「中和」は、音声の混同が仮名遣いの混乱から推定されるように、それ以前には一定の弁別がされていた語彙の範疇が混乱してくる現象によつて、その発生が推定される。現在、語彙上、この「中和」と考えられる現象には、一例として挙げれば、次の諸現象が該当すると位置付けられる。

呉音読みと漢音読みによる語彙の相違は、現代では意識されないが、古代には、仏教関係の呉音読みのように、一定の語彙的な相違と関連していた。現在でも残る区別で、意味的な使い分けを持つものでは、気色(ケシキ、キシヨク)、自然(シゼン、ジネン自然薯)、男女(ナンニョ老若男女、ダンジヨ)などがあるが減少した。

これらの中和において、その区別が失われ「中和」が完了した時期の判断は、その判断の基準によつても相違し、語がいつ消滅したと言えるかというのと同様に容易ではない。例えば、呉音・漢音の混同という比較的研究が進んでいる分野でも、次のように、近代と中世とでの異なる見方がある。

「一語内で漢音呉音を混同するのは主として明治以後の風習らしい。」(築島裕一九五八、西尾・時枝監修一九五八『国語教育のための国語講座第4巻語の理論と教育』朝倉書店)

「中古には特殊な人名の漢語にしか存在しなかった漢音・呉音混在の例が、次のように普通の漢語にまで、見出せる。(引用者注・中世での「虚言 下女 御影 御法度」などを挙げる)

／漢音・呉音が別系統の字音であることを意識せず、どちらも

漢字の音として等し並みに取り扱われる傾向を示すものと思われる。」柏谷嘉弘一九八二『漢語の変遷』『講座日本語学4語彙史』六二頁

また、語彙的カテゴリーそのものの減少や統合には直結していないが、区別意識の希薄化を間接的に示す現象も注意しておく必要がある。例えば、湯桶読み・重箱読みは、漢字の音と訓との間のそれ以前までの区別意識や、和語と字音語（漢語）の区別が、次第に希薄になっていくことを間接的に投影していると考えられる。中世に多くなるのも、漢語の浸透時期や、和語の漢字表記語の音読み漢語の発生（かへりごと▽返事）とも時期的に重なっている。

「重箱読みや湯桶読みは、ことに中世になってから盛んに用いられるようになったらしい。」（築島裕一九五八、西尾・時枝監修一九五八『国語教育のための国語講座第4巻語の理論と教育』朝倉書店）

これらが語彙史として特に注目されるもう一つの理由は、これらの時期が、新たな語彙的カテゴリーの増加や、それに属する語の増加なり浸透の時期と、相接近している傾向が認められるからである。相互の影響関係がうかがえるのである。

これまでの語彙史研究では、このような消滅したもの、失ったものと対比する視点が弱かった。音韻や文法の史的的研究では、どのような事象がどういう理由で消滅することとなり、なぜ新たな事象が生じてきたのかを常に対比させて考察し、それによって変化の史的

意味付けがなされて、歴史的研究が行われてきている。語彙の研究が、これまで体系的な「語彙史」としての具体像を描き出せなかったのは、このような対比の視点が希薄であったためでもあろう。

いずれにせよ、「中和」は、語彙史研究においては、語彙の部分語彙の増加と関連する現象で、語彙の体系的变化の一端を担う現象と位置付けられる。これまでは、「中和」の発生やその過程そして完了時期などの判断が容易でないという調査上の現実的問題もあるため、顧みられてこなかったという事情があろう。しかし、語彙的カテゴリーの増加ということを考えていく上では、表裏一体の関係にある「反作用」的現象として、今後検討していく必要がある。

3—2—(3) 語の単位の長単位化・短単位化——「多音節語化、複合語増加」

日本語の単語の長さは、本来1音節語と2音節語が基本的な単位であったと考えられている（動詞・形容詞等は語幹部分）。それが、接辞の付加や派生などによって合成語が作られ、また、2語以上が複合して複合語が生じ、全体としては長い単位になってきた。基礎語彙には1音節語・2音節語を残しながら、多音節化、複合語化してきた。これは、形態と語構成の面から見た語彙史の特徴の1つである。

○形態・語構成から見た語彙史の特徴——多音節化・複合語化

この「多音節化・複合語化」という観点から見た語彙史の細部の実態となると、全体的統一的な記述がなされている段階にはまだな

表4 語構成における「多音節化・複合語化」から見た語彙史（「長単位化」の語彙史）

史前	1音節語・2音節語が基本 エ(枝・柄・絵・餌・江・重 etc.)、モル(守)
上代以前	派生語・複合語の発生 エダ(枝エ+夕手)、守る(目+守る)
上代	3音節語・4音節(以上)語の増加(枯れ枝、見守る)、和語の多音節語の登場(歌という「文体」条件での臨時一語的歌語—夕波千鳥)
中古(中期以降)	形容詞の複合語の増加(ものこころぐるし)
中世(前半)	動詞の複合語の増加 漢語の複合語の増加
中世(後半)	動詞複合語の定着
近世	和語の長い複合語の増加、臨時一語的な語句の増加 (おもてあそびもの>おもちゃ、「独活の鱈の柚車(←淀の川瀬の水車)」p.248、「お茶漬けさらさの風呂敷包み」p.251、『『弔い道具の龍頭』という面だ』p.159、旧日本古典文学全集、所謂地口の例など。『其小唄恋情紫(そのこうたひよくのむらさき)』『花名所懐中曆(春水、題名)、臨時一語的なものも含む)
近代	漢語の長い複合語の増加「文部省教科用図書調査委員会」「全日本学生自治会総連合(全学連)、臨時一語的語の増加「申し込み受け付け締め切り日」
現代	外来語の複合語の増加 インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオン、モラル・ハザード、ビジネス・ランチ、

い。もちろん、個別の現象や、個々の資料、一部の時代などでは、ある程度の記述が進んでいるが、特に中世・近世・近代については、資料と文体が多様であることもあって、分析観点や情報量の上で、前後の時代とをつなげるまでの段階には至っていない。しかし、「多音節化・複合語化」が語彙史の特徴であるなら、その観点からの通時的変遷を説明していくことは重要な課題であると思われる。次に示したのは、「語構成」(特に語の長さ)の観点から、私見によって仮にまとめてみた語彙史年表である。

単なる「多音節化・複合語化」というだけでなく、全体として「長い形態」への段階的史の変遷があったことが認められる。表内で「増加」とした基準も厳密な段階ではなく、より詳しい記述は課題であるが、今後は、このような一定の通時的視点からの詳しい語彙史の記述が求められる(安部二〇〇九・a(第一章)の語彙史年表の一つの試みとして提示しておく)。

ここで問題としたいのは、これまで「多音節化・複合語化」の現象にばかり目がむけられ、見落とされてきた視点である。「多音節化・複合語化」は、言わば長い単位になることであるが、「長単位語化」した語の増加は、総体としての「語彙」の質的变化を意味するという点で、例えば次のような問題と関わってくる。

○「多音節化・複合語化」と言っても様々な場合があるが、それぞれの場合において、「長単位化」することには、語彙的にどのような意味(メリットなど)があったのか。

○それ以前の短い語形はどうなったか。変わらなかったのはどのような語彙か。

○それ以前の短い語形と、新たな長い語形との関係はどうであるか。

○長くなるばかりで反対に短くなるという現象はないのか。

○短くなる現象とそれ以前の語形との関係はどうであるか。

○短くなる現象があるなら、その「短単位化」と、上記「長単位化」という相反する変化現象の相互の関係は、語彙としてはどのように考えられるか。など。

長くなるのが便利な部分もあれば、かえってマイナス面も生じることが考えられる以上、長くなった語と変わらなかった語との相違はあるか。短くなった現象はないか。長くなることを阻止する動きはなかったか。反対方向に働く現象は、全体としては、言わば何らかのバランスを取ろうとする動きであり、一種の「反作用」的な動きでもあろう。それらが、相互に関わっているならば、全体としての均衡をどこかで維持しておこうとする構造的な動きと解釈される。とすれば、それは、ある種の語彙の体系的な特性を現している現象と解釈できる。「多音節化・複合語化」という「長単位化」が、語彙史の特徴であるならば、その反対の現象、反作用的な「短単位化」をも、語彙史の問題として考える必要があった。

しかし、そのような語彙史上の体系的関連性から見た変化は、あまり問題視されてこなかった。ここでも、音韻や文法と比べて、現

象の一面のみに偏っている分析が、研究の遅れの要因になっているように思われる。

さて、その「長単位化」あるいは「多音節化・複合語化」とは反対の現象として、いくつもの現象が挙げられる。従来「略語」や「縮約」として扱われてきたものもその一つである。しかし、これらが取り上げられる機会は少なく、縮約は音声現象として扱われ、略語も専門語や漢語など一部の語や俗語的表現といった限定した扱いであることが多かった。

西尾寅弥一九七六「造語法と略語法」『日本語講座4』大修館書店)は、造語法との対比から取り上げている点でも注目される数少ない貴重な論考である。PTA、NATO、ATCなど「普通の単語のように読み下す acronym もふえている」ことにもわずかながら言及されている。ただ、現代語の複合語の省略が中心で紙幅は少なく(5頁)、歴史的問題は考察されていない。玉村文夫二〇〇二では「対照語彙論」として取り上げられ、「通常(略語)と呼ばれる」としながらも、「縮約語」(見出し)として広い視点からとらえようとしているが3頁分相当の簡略な紹介に留まる。この「対照語彙論」の章では取り上げられているが、この講座の「語構成」の章では触れられていないという点からも、この短単位化現象のこれまでの扱いがわかる。『日本語学研究事典』二〇〇七には、「略語」のみが立項され、その中で「略熟語」(乳児+幼児↓乳幼児)がある程度である。また、和語の音節融合などの縮約は従来音声上の問題

表5 「短単位化」の現象

- ①基本音節数への回帰「複合語の二音節化」——基本的二音節に回帰する現象
 ア 語の熟合——札ふだ(文板)、ふで筆(文手)
 イ 和語の二音節化——きざ←気障り、みせ←みせだな(店棚)
 ウ 外来語の二音節語化——スト←ストライキ
 エ 形容詞(語幹)の二音節化——うざい←うざったい、キモい←気持ち悪い
- ②音節の熟合(音節の繰り込み現象)(和語)——マホシ(←マクホシ)、マイ(←マシ←マシジ)、候(そうろう)(ソ←ソロ←ソウロウ←サモラウ)(「煮つまり現象」(大野晋一九七八『日本語の文法を考える』岩波書店)
 (①のア・②は音声的現象として「縮約」とされることもある)
- ③省略・略語化
 和語の簡略化 ——からたち←からたちばな、茄子←おなす(女房詞からの簡略)
 漢語の簡略化 ——特急←特別急行、年休←年次休暇、空母←航空母艦
 外来語の簡略化——ホーム←プラットホーム、マスコミ←マス・コミュニケーション、パーマ←パーマネント←パーマネントウェーブ、イントロ←イントロダクション
- 文字と関わる現象**
- ④万葉仮名表記の正訓表記化「漢字表記における短単位化」——
 ⑤和語複合語の漢字表記語による字音漢語「和語の漢字音語化による短単位化」——ものさわがし⇒物騒⇒ブッソウ、かへりごと⇒返事⇒ヘンジ、こころいたし⇒心痛⇒シンツウ
 ⑥アルファベット語化——外来語のアルファベット語化による短単位化
 ア PTA←父母教師会、TV←テレビジョン、NPO、WHO、etc.
 イ PC(ピーシーという新語形の誕生)←パソコン←パーソナル・コンピュータ←小型電子計算機
 ウ KY(語)などの和語の略語、AKB(秋葉)、MK5(マジキレル5秒前)
 ⑦「外来語訓み漢字」——「ワールド杯」(カップ)、「モンスター親」(ペアレント)

として扱われており(鼻音性音節の濁音化(かみさしーかざし))、語彙の問題として考察されてはいない。

意味論的には、「一語の意味が変化すれば関連語の意味も影響を受ける」と言われる意味の「定説」があるが、同じことは、語彙構造にもあてはまる。一つの語彙現象によつて、語彙構造に変化が生じるとき、その影響を受ける他の部分に別の構造変化が生じ、また、その動きへの抵抗や反動は言わば「反作用」「反現象」としてマイナス作用の現象を生み出していく、と考えることができる。現象を、語彙といういわば複合的構造体が全体として変質していく連鎖的動きとしてみていくべきではないだろうか。

では、「多音節化・複合語化」に対する広い意味での「短単位化」として、どのような範囲までが対象と考えられるだろうか。略語と音節の縮約・省略のほかに、語の熟合、一単語化などが考えられる。また、形態のほか、語彙的カテゴリーの1つとしての「文字」のレベルも含めれば、文字数の上での短単位化としての短縮、つまり、文字数の減少や、文字上での略語化(略記号化、アルファベット化)などが、広くその対象になることがわかる。

「多音節化・複合語化」する一方、「短単位化」も生じ、かつ、長くなる前の語形も保持されてきた。それらの現象が、全体として語彙の構造にどのような影響を与えてきたかを総合的に検討していく必要がある。

- ①類義語の増加——背||背中、子||子ども(短い語形も残ること
で、必要に応じた選択を容易にした)
 - ②類義語間の意味の分化——湯(風呂)||お湯(飲料)
 - ③文体差の発生(新旧差による文語・口語などの相違)——名
(文語)||名前、野(文語)||野原、尾||尾っぽ(口語)、か(香)
(文語)||かおり(カの複合語と解釈した場合)
 - ④複合語化による下位概念での語彙化——毛||睫毛、眉毛、腋毛、
髭(ヒ毛)、刷毛(ハケ)、カ(香)||移り香・残り香・腋臭
(香)
 - ⑤新語の形成——(表記上の短単位化)和語の音読み漢語「火
事」^ひのこと(火のこと)
 - ⑥新語種の形成——(表記上の短単位化)PC(ピーシーハパソ
コン)、KY語(KY式日本語)
- 興味深いのは、これらの短単位化の動きが、関連する長単位化の
現象と時期的に連動しているように見える点である。和語が多音節
化・複合語化しはじめたであろう上代(以前)と和語の熟合が多く
現れている時期は近接している。複合語が増加していく中世には、
漢字表記語が増え、また、漢字表記によって生じた和製漢語(では
るV出張)が見られる。漢語の長い複合語や外来語の複合語が増大
していく近現代では、漢語略語、外来語の略語の増加がある。時期
的に見て相関関係がうかがえる。より詳細な調査と考察が必要であ

る。また、略語化には「①語形が長いこと、②語の使用頻度が大き
いこと、の2条件が前提となる。」(玉村二〇〇二)とも言われるか
ら、計量的研究からの検討も必要となる。

長単位化と短単位化の二つの現象は、相互に関連性のある語彙史
研究の新たな課題として、より詳しい研究が必要であると考える。

第4章 語彙と部分語彙

4-1 部分語彙というものの課題

語彙の特徴の1つには、その語彙的カテゴリーの多様さがある
(安部二〇〇九a)。

語彙的カテゴリー||意味、形態、語構成、語種、文法機能、文
字、位相、文体、文化、意味分類体系(シソーラス)による分
析、計量的分析

例えば、その語種1つの中も和語・漢語・外来語、それらの混種
語や外国語、アルファベット略語などの下位分類があり、さらに外
来語も出自の国によって分類される。

また、語彙の単位である1語の位置付けは、語彙的カテゴリー1
つだけによって行われるのではなく、いくつもの観点から多重に行
われるという特徴をもつ。これらのことは、語彙を切り出し分類す
る観点が多様になるということの意味する。それは、別の見方をす
れば、それだけ、「語彙」には、いわゆる「部分語彙」が多く設定

でき、「部分体系」とも言われてきた「部分的構成体」が多く存在するということでもある。このような特徴は、これまでの研究自体が多岐多様で複雑であった理由でもある。

これまで、研究の作業手順として、「語彙全体の研究のためには、まず部分語彙の研究から積み上げていこう」（柴田武、前田富祺など。湯浅、二〇〇二参照）と提唱されてきたが、その主張は、「語彙のカテゴリー」の、このような特性から見ても妥当であった。

さて、このように見てみると、音韻・文法には見られない語彙の「部分語彙」の多様さと多重構造それ自体が語彙の「体系」の特徴でもあると考えることができる。従来、そのような「部分語彙」というものの自体の特徴が検討され、「語彙」全体と「部分語彙」というものの関わり方を問題とするという視点はなかったように思われる。別の言い方をすれば、「語彙」の体系という考え方において、語彙全体における「部分語彙」の位置付けや「部分語彙」同士の間が語彙の体系性と関わっている、ととらえる視点はなかった。

語彙的カテゴリーの構造（安部二〇〇九a）を見ると、表1が示している個々のカテゴリーの総体は、それらの研究観点から見た語彙の全体像それ自体が、すなわち、「語彙」なり「語彙の体系」であることを示唆している。つまり、語彙の全体像は、さまざまな語彙のカテゴリーから考察された語彙（それぞれの特徴から切り出した語彙の性格）の総合的な姿であると見ることができるようになる。宮島達夫一九七七の次のような解釈も、同じように語彙を把

握していると思われる。

○「語彙の体系は一つの平面のうえにかけるようなものではない。それは、意味、形、文体などいくつかの側面の総合としてある」（宮島達夫一九七七、四頁）

これまで、先のような「部分語彙の研究から」という提唱にも見られるように、語彙は部分語彙に分けられる、という理解はあった。しかし、「部分語彙」の特徴ということは議論されてこなかったのであった。研究史を概観した湯浅二〇〇二でも、次のような表現で、「部分語彙」の問題が議論されていないことを訴えている。

○「一方、語彙の部分体系（指示語〈コソアド〉・親族呼称・色彩語・身体語など）の記述に関しては、多くのすぐれた研究があり、次第に明らかになりつつある。柴田や前田も、語彙全体の体系記述を意図しつつも、部分体系のすぐれた記述を行い、部分体系の記述の機運を刺激した。それに対して、語彙の体系的な体系の記述はほとんど行われていない。いまだ語彙の体系は明らかにされていない。しかも近年、語彙の体系についての議論は少ない。柴田や前田が提唱する仮説的な部分体系の記述が、どのように語彙全体の体系記述へ展開していくのか。部分体系はあくまで部分体系の記述で終わってしまうのか。全体形の記述に向けて新たな視点はあり得るかなど、今後、活発な議論と方法論の提示がなされる必要がある。」湯浅、二〇〇二

理論や方法論の遅れは、研究史の新鮮さのほか、理論よりも実証

的研究優先（優位）という、従来からの「国語史」的研究の影響が認められそうである。語彙の全体的把握のためにもまず「語彙全体と部分語彙との関係」「部分語彙同士のある方」「部分語彙と語との関係」などが、改めて議論される必要があると思われる。

なお、この「部分語彙」の扱い自体も語彙の特質を象徴している問題である。音韻や文法にも、それぞれ全体から切り離して扱われる問題はある。例えば、付属語から一部の助詞のみを取り上げて考察することはあるが、それをあえて「部分文法」「部分体系」とは扱っていない。それはおそらく「助詞」の位置付けが品詞体系の中で明確になっていないからであろう。

それと比較するなら、語彙の部分体系が問題なのは、当該部分語彙が、語彙全体における、どのシステムの1部になっているか、その位置付けが不明ないし未確立であるためでもある。あるいは、その考え方が多様で一定の基準となるものも確立していないことに、研究の遅れのもう1つの原因があると考えられる。

しかし、そのことも、部分語彙が多岐多様であることによるのであるから、やはり、「部分語彙」に象徴される語彙特有の問題を説明することが、語彙の独自性を説明することになる。つまり、部分語彙の、語彙全体の中でのあり方や、部分語彙同士のあり方が、語彙の仕組み（体系）の独自性ということに直結してくると思われるのである。

「語彙」と「部分語彙」との関係を整理しておけば、次のように

まとめられよう。

○「語彙」の特徴の1つは、語彙全体が、多様な観点から設定される多くの「部分語彙」から成り立っていることである。

○その「部分語彙」が、語彙全体の中で多角的多重構造的に構成されて存在し、語彙全体の特徴を形作っていると考えられる。

語彙を部分語彙の総合体として把握し、まずはその部分語彙と語彙全体との間の関係を説明する必要があることになる。以上のような考えに立ち、次に、「部分語彙」の問題を検討してみたい。

4-2 部分語彙と語彙との関係

4-2-1 部分語彙の多さ

これまでの語彙研究が遅れの要因になっているものは、裏返してみれば、音韻・文法とは異なる「語彙」特有の性質によるという見方ができる。つまり、遅れの要因自体が、一方で、「語彙」の特性を投影していると考えられる。その停滞の要因の1つは、単位（語）の多さであり、それへのいろいろな研究方法を可能としているその多様な性質にある。

(0) 語彙は、音韻・文法に比べて（以下、この部分の表現は略する）、研究対象である単位が多く、その分、その部分的構成要素（部分語彙）が格段に多い。

この特徴は、語彙である以上当然であると考えられ、これまであえて挙げられることはなかった（それゆえ、ここでは番外の意味で0番を与えた）。しかし、この当たり前に思われる特性も、詳しく見ていけば、（以下にあげていくような）他の性質とも関わってくる語彙の特徴と考えられる。少なくとも、単位（語）が多ければ、それだけそれらを分類しうる観点はおのずと多岐多様になり、部分語彙が増大するのは当然である。それゆえ、それが少ない音韻・文法に比べて、多様で複雑な要素間の仕組み（体系）が形成される要因となる。その多様さが語彙体系の特徴であると認識すべきである。

4-2-2 語彙は部分語彙の集合からなる

語彙全体は、その構成要素となつていくいくつかの部分語彙の集合体として把握できると仮定できるなら、語彙と部分語彙との関係は次のようにとらえることができる。

（1）語彙（の体系）は、いくつかの部分語彙が形作る部分的体系の複合からなる。その意味では合体型である。

ところで、構成体全体がいくつかの部分構成体から形成されている、という性質は、通常の構成体の多くにごく普通に認められる特徴である。それは、本質的には、おそらく、分析や解釈する人間の知覚・認知が、どのような複雑なものでも、そのようなかたちで、

整理し体系的に枠組みを組み立てようとするためであろう。つまり、そのように「認知」していくことが、理解する上で「合理的」と感じるためだからと思われる。その意味では、「部分的な複数の構成体に分割しながら全体的構成を把握する」のは、人間の認知・知覚の仕組みの投影、ないし、そのものといえることができるのであろう。それゆえ、上記の特徴は、実は「語彙」に特に限定して改めて指摘するような特性なのではないとも言える。例えば、文法においても、品詞という文法カテゴリーから見れば、「助動詞」は文法体系の部分的構成要素であり、形容詞・助詞などの他の品詞が同じように形成している部分的構成要素から、文法全体の体系が出来上がっている。音韻でも同様である。では、音韻・文法とは、どのような点が異なっているか。

それは、語彙の部分体系と見なせる部分だが、（音韻・文法の2者間では大きな相違がないのに比べて）、言うなれば「桁違い」的に多くなっている、と言う点である。音韻・文法に比べて、格段に多い分、部分語彙同士の関連性（構造）もより多様で複雑になっているということができる。

4-2-3 語彙の多元的性質

音韻・文法においても多様な研究方法があり、また、研究の進展にも伴って新たな研究観点も提示されてきているのであるが、語彙においても、それらにも増して多様な角度からの研究があることが、

全体像をとらえにくくしている要因となっている。

語が多いところにもつてきて、「研究の観点もさまざまな切り口が可能である」(湯浅二〇〇二)のために、さまざまなアプローチが試みられる。このことは、逆に言えば、語ないし語彙は、多様な側面、あるいは、多次的性質とでも言えるような特性があると言えることができる。つまり、多面的、あるいは、多元的とでも言える性質も、語彙の特質であると位置づけることができよう。

(2) 語彙の(部分)体系は、多面性・多元的性質をもつ。

これは、語彙の要素である語相互の比較が、基本的に横並びのパラダイグマテクな関係にあるためである。文法における品詞は、シntagマテクな関係を持ち、また、例えば助動詞におけるヴォイス、アスペクト、テンスなどのカテゴリなども基本的に相互排他的な関係が多い。音韻では、子音・母音などの音素と、音節構造、アクセント、イントネーションなどでは単位が異なる。語彙のように、同じ語や同じ部分語彙に対していくつもの分析観点が重複することにならない。

4-2-4 語彙は重層的性質を持つ

多元的性質をもつ語彙は、同じ意味の語(語彙)が、異なった語彙のカテゴリの特徴を持ったまま、目的に応じて交換可能な衣装

のように、複数併存している。そのような性質を、いま仮に、重層性・多層性と見なし、「重層的性質」と呼んでおくことにしたい。

(3) 語彙の(部分)体系は、多層性、重層的性質をもつ

例、和語起源と漢語起源、外来語起源の重層

意味	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
和語	ヒ、	フ、	ミ、	ヨ、	イ、	ム、	ナ、	ヤ、	(ココ)、	(トオ)
漢語	イチ、	ニ、	サン、	シ、	ゴ、	ロク、	シチ、	ハチ、	ク(キュウ)、	ジユウ
外来語	ワン、	ツー、	スリー、
仏語	アン、	ドゥ、	トロワ、
独語	アイン、	ツバイ、	ドライ、

やど	— 旅館	— ホテル
はじめ	— 開始する	— スタートする

語種以外でも、文体的な語彙の相違にも類似の状況が認められる(このほか、文字や位相にも認められる)。

意味	(body)	(sit)	(very)
文章語	身体	のべる他	やはり
日常語	からだ	いう他	やつぱり
俗語・卑語	ずうたい	ぬかす他	とても・たいへん
		やつぱ	メツチャ・超

文字では、書き分けによるニュアンスや使用場面の相違が見られる(表参照)。

これらは、意味的に同義・類義として意識される語が、交換可能

なものとして意識されているという意味での重層性である。類義語・同義語など、「意味」の上での共通性をもつ場合に認められる性質と言える。

平仮名	カタカナ	漢字	ローマ字
すし	スシ	寿司	Sushi
きもの	キモノ	着物	Kimono
こめ	コメ	米	Kome
ひこうき	ヒコキ	飛行機	—
ひんしゆく	ヒンシユク	颯塵	—
ばら	バラ	薔薇	—

一方、事例は多くはないが、「形態」における同音語も、社会的に一定の定着をしているものには、ある種の「重層的性質」を認めてもよいようである。具体的な事例としては、特にシャレ・駄洒落などにおける形態的重層性の問題で、ごく日常的に頻用されているようなものになると、多くの人が、一方の形態をイメージしやすく、かつ、理解されやすい傾向が顕著であると言えるよう。

共通要素	形態	トリ
意味領域	動物	鳥類
	食物	鶏肉
	順位	最後（「トリをつとめる」）

「苦手なのはトリね。トリはだめだわ!」「肉? 動物?」

「今回は、トリをいただきました。」「肉? 動物? 順番?」

これらでは、話者には1つの意味であるが、聞き側から見た場合

において、動物としてのトリという形態と、食肉としてのトリ（鳥肉の省略形）という形態などが、同じ1つの形態の中に重層している、と見ることができると。

一般には、文脈もあり意味の取り違えをしないように聞き取っていくので、基本的に、日常では同音異義語であっても、2つの意味的併存は排他的に選択され理解されていく。右は、あくまで、同意語という意味の問題だけではないこと、同形語という形態の面にも、重層的性質が認められる場合があることを例示した。

4—2—5 語彙は融合的性質をもつ

日常の口頭語では、「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、なな（↑シチ）、ハチ、ク、とお（↑ジュウ）」と漢語と和語とが混在したかたちで使われることが多い（カタカナが漢語、ひらがなが和語）。

これを一つの語彙体系と見なすと、先に見たように漢語、和語が、日常口語レベルでは、漢語と和語との相違が意識されず混在するようになつてきたことを表す。語種の語彙的下位カテゴリーである和語・漢語という区別が中和して一つの語彙的まとまりとして融合したことを意味する。このような特徴を「融合」ととらえ、語彙部分体系の「融合的性質」と位置付けることができる。

(4) 語彙（の部分）体系は、時に融合性をもつ。

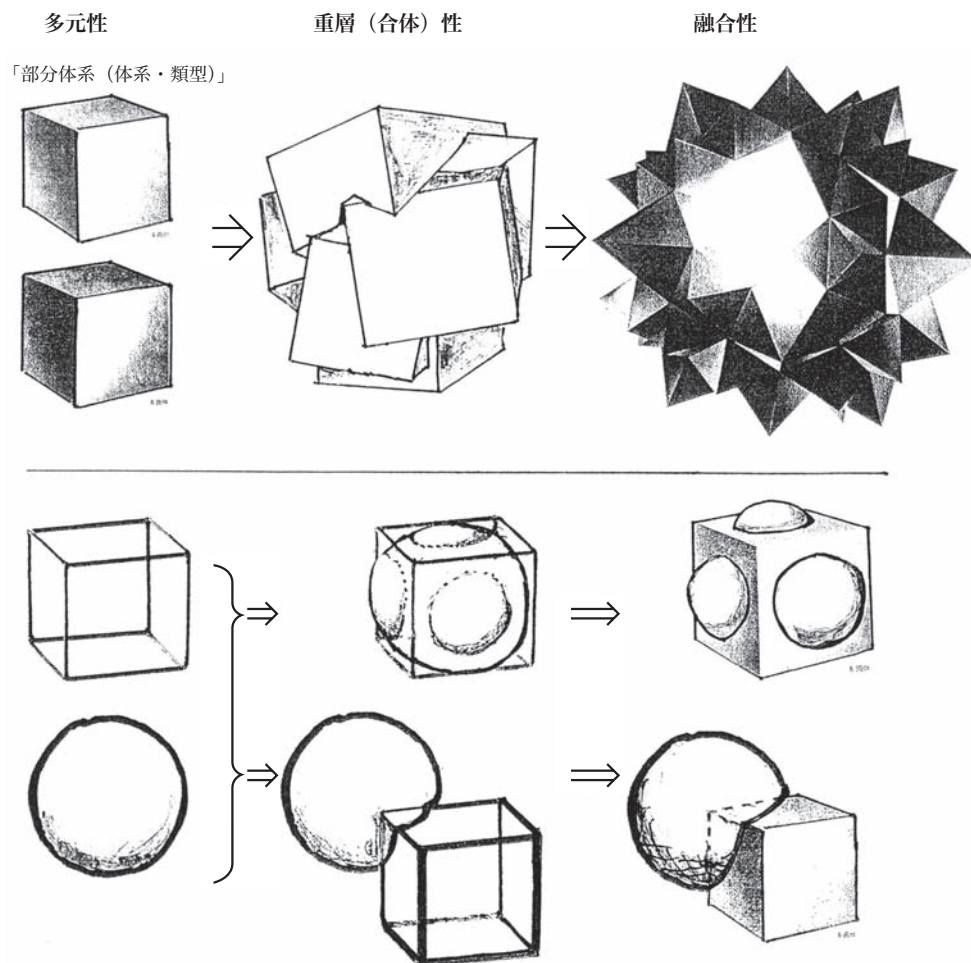
語彙の「多元・重層・融合モデル」

(安部清哉2003シンポジウム提示資料より)

「部分体系 (体系・類型)」の「多元性」とそれらの「重層性」による変化「融合性」

より優位な構造が、基本構造として残りつつ、しだいに混然と融合していく。

(例、色彩語彙——基本四語による基本的部分は、用法 (赤味噌) や派生語 (アカアカ、～サ等) に残りながら、色彩語彙としては外来語も含め、「増殖」している。)



さらにこれら(3)「重層性」と(4)「融合性」という性質は、単語を単位として、その多面的性質を分析しようとする語彙において、顕著に見られる特徴といえることができる。音韻・文法におけるカテゴリーでは、同じ要素に対して1つ以上の複数の観点から分析することがないわけではないが、分類カテゴリー自体が多くの場合それぞれ独立した体系をなしている。音韻における、子音、母音の音素の問題と、アクセントの問題はそれぞれ別次元のカテゴリーをなしている。語彙において、一つの語、例えば、「父」が親族名称、2音節名詞、完全重複形、和語、漢字表記語、名詞(人称代名詞)、単純語、改まった言い方、「威厳」「地震、雷、火事、親父」などの文化的意味をもつ語、「といった非常に多くのカテゴリーに属している重層的性質を持っている」というのとは、異なる。しかも、それらの中の下位カテゴリーは、時代や社会の変化に伴って、それぞれの語の所属、位置付けを変えていくために、部分的語彙体系が変化していくことで、融合的性質をもつことになってくる、と解釈できる。その意味で、「重層性」「融合性」は、特に語彙に顕著に現れる特性と見ることができるといえる。

4-2-6 語彙の部分体系の独立性

語彙には、「意味」の語彙的カテゴリーの上で、多くの部分語彙が広い領域にわたって存在している。その中には、一般的に使用される語彙とは大きく隔たり、その語彙の世界のみで完結していると

も言えるような独立性の高い部分語彙が認められる。例えば、医学用語、軍隊用語など専門用語の語彙や、特殊な位相に属する語彙、あるいは、隠語などの類である。

それらの語彙の中には、一般的語彙と同じ形態であったり、ある程度、理解可能なものもあるが、中には、その分野でしか理解されず、使用もされないようなものがある。他の一般的語彙とは、多くの場合、交渉を持たず、独立性が強く、限定されているという特性を認めることができる。そのような、体系全体の中の位置が、特に独立しているような部分的要素の存在は、音韻・文法においては基本的に認めにくいように思われる。そのような部分的要素、つまり、部分語彙に独立性の高いものがある、と言う性質は、語彙の体系的構造的特質の1つといえることができる。

(5) 語彙の中の部分的語彙には、他の部分より独立性の高いものがある。

4-3 語彙の体系的特性の考え方 まとめ

これまで見てきた語彙の部分語彙の特性をまとめると次のようになる。

(0) 語彙は、音韻・文法に比べて(以下、この部分の表現は略する)、研究対象である単位が多く、その分、その部分的構成要素(部分語彙)が多くなる。

(1) 語彙の体系は、いくつかの部分体系からなる。その意味では合体型といえる。

(2) 語彙の(部分)体系は、多面性、多元的性質をもつ。

(3) 語彙の(部分)体系は、多層性、重層的性質をもつ。

(4) 語彙の(部分)体系は、時に融合(複合)性をもつ。

(5) 語彙の中の部分的語彙には、他の部分より独立性の高いものがある。

これらは、音韻・文法と比較した場合に、相対的に見て、語彙のもつ仕組み、語彙の体系の特徴と理解することができると思われる。部分語彙の特性は、すなわち、それによって形成されている語彙全体の体系的特質と見なすことができる。

語彙がこれらのような特性をもつゆえに、その多元性・重層性・融合性のような特性をもつ言語現象については、それらの性質を弁別して分析しやすい語彙の面からのアプローチが、むしろ有効であると考えられる。例えば、日本語の系統研究や、社会言語学的な研究には、語彙の面からアプローチすることが、対象の特性を解明しやすいという意味で応用範囲が広く、有効と思われる。

(応用1) 多元性、重層性、融合性をもつ言語研究の対象には、音韻・文法からのアプローチよりも、語彙の面からの考察が有効である。

本節では、語彙の部分語彙のもつ特徴から語彙の体系の特性を考えてみた。提示した諸特性の具体例やより厳密な定義については、機会を改めて取り上げていきたいと思う。

第5章 むすびとして

本稿では、語彙史研究に関して、次の問題を取り上げ検討した。

- 1 語彙史研究における研究史概観
- 2 語彙史研究における研究課題としての理論的問題
- 3 理論的問題として、語彙史研究における研究領域としての「語彙的カテゴリー」の提示と、その体系化による研究パラダイムの提示
- 4 語彙史研究の基礎的研究として、語彙の特性に関して、次の概念とその研究の必要性を新たに提示した。——①反作用、②反現象、③中和、④部分語彙の諸特性

なお、本論は、次の2つの拙論と連続するものであり、本稿がそれらの中間部に位置する構成にあたる関係になっている。合わせてご参照いただければ、幸いである(注)。

○安部清哉二〇〇九「第1章 語彙史研究と語彙的カテゴリー——その多様性と体系化——」安部清哉・金水敏編『シリーズ

日本語史 2 語彙史』岩波書店

○安部清哉二〇〇九「第3章 意味から見た語彙史」安部清哉・

金水敏編『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店

注 補足すれば、安部二〇〇九a・bのためにまとめた一連の拙文の中から、紙幅上、そこに納められなかった部分のおよそ半分程が本稿にあたり、相互に関連する内容となっている（さらに残る部分は機会を改める）。一部内容上の重複や類似する表現があるのは、そのような理由により、独立して読めるようにするためである。御了承いただければ幸いである。

【参考文献】

浅見 徹（一九七二）『古代の語彙Ⅱ』『講座国語史3 語彙史』第3章、大修館書店

安部清哉（一九八五）『国語語彙論の方法について』『文芸研究』110

安部清哉（一九九〇）『語彙（史的研究）——特集—昭和63年・平成元年における国語学界の展望』『國語學』161、国語学会

安部清哉（二〇〇三）『記述と仮説と実証と理論との相互作用的発展——主に語彙史研究の視点から——（シンポジウム要旨）』『国語学』215。より詳細は、『国語学会二〇〇三年度春季大会予稿集』大阪女子大学

安部清哉（二〇〇七）『味覚形容詞語彙の歴史と日本語基礎形容詞語彙の典型的構造——スシ・スカシの語源の再検討から——』『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』（平成一六—一八年度科研究費研究成果報告書・代表・金水敏編）、一五—二八頁、私家版

安部清哉（二〇〇九a）『第1章 語彙史研究と語彙的カテゴリー——その多様性と体系化——』安部清哉編『シリーズ日本語史 2 語

彙史』岩波書店

安部清哉（二〇〇九b）『第3章 意味から見た語彙史』安部清哉編『シリーズ日本語史 2 語彙史』安部共編・共著

泉井久之助（一九三五）『語彙の研究』『国語科学講座Ⅲ』明治書院

井上史雄（一九九八）『日本語ウォッチング』岩波書店

大野晋・柴田武編（一九七七）『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店

小野正弘（二〇〇二）『通時態主導による『語彙』『語彙史』『国語学研究』40

金沢裕之（二〇〇八）『留学生の日本語は、未来の日本語』第3章、ひつじ書房

国語研究所（一九六二）『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊——総記および語彙表——』『同 第二分冊』『同 第三分冊』秀英出版

国立国語研究所（二〇〇五）『現代雑誌の語彙調査』

齋藤倫明編（二〇〇二）『朝倉日本語講座4 語彙・意味』朝倉書店

阪倉篤義編著（一九七二）『講座国語史第3巻語彙史』大修館書店

佐藤喜代治編著（一九八一—一九八三）『講座日本語の語彙 全11巻別

巻1』明治書院

佐藤武義編著（一九九二）『概説日本語の歴史』朝倉書店

田島毓堂（一九九九）『比較語彙研究序説』笠間書院

田島毓堂（二〇〇四）『語彙研究の課題』和泉書院

田中章夫（一九七八）『国語語彙論』明治書院

田中章夫（二〇〇二）『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版

田中章夫（二〇〇二、一〇）『語彙研究の諸相』斎藤倫明編『朝倉日本語講座4 語彙・意味』第一章、朝倉書店

田中章夫（二〇〇八）『マス』から『デス』へ——丁寧体の変容——『近代語研究』14

- 玉村文郎編(一九八九・一九九〇)『講座日本語と日本語教育 第6巻・第7巻日本語の語彙・意味(上・下)』明治書院
- 徳川宗賢(一九九三)『方言地理学の展開』ひつじ書房
- 中田祝夫(一九七二)「第1章 総論」『講座国語史2 音韻史・文字史』大修館書店(六〇・六一における「国語・仮名づかい変遷表」の一部をいま便宜上「音韻史年表」と読み取って取り上げた)
- 林 四郎(一九七一)「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究III(国研報告39)』秀英出版
- 広瀬英史(二〇〇〇)「比較語彙論的方法による語彙研究の可能性とその方法」田島毓堂『比較語彙研究の試み4』名古屋大学大学院研究国際開発研究科
- 前田富祺(一九八五)『国語語彙史研究』明治書院
- 前田富祺(一九九五)「日本語の歴史 語彙」『言語学大辞典』一六四七頁、三省堂における語種の変遷
- 前田富祺(二〇〇二)「第11章 語彙史」『朝倉日本語講座4 語彙・意味』朝倉書店
- 宮島達夫(一九六七)「現代語いの形成」『ことばの研究』(国立国語研究所論集3)秀英出版
- 宮島達夫(一九七七)「第1章 語彙の体系」大野晋・柴田武編(一九七七)『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店
- 宮島達夫(一九九七)「雑誌九十種表記表の統計」『日本語科学』1、雑誌九十種の最終的語彙数と統計が掲載されている。
- 宮島達夫(二〇〇五)『語彙論研究』むぎ書房(宮島達夫(一九七七)を収める)
- 宮島達夫(二〇〇七)「語彙調査からコーパスへ」『日本語科学』22、雑誌九十種と雑誌70誌の比較、雑誌九十種の語数に関する注意が記されている。

- 宮島達夫(二〇〇九)「語彙史の比較(1)——日本語(雑誌90種と雑誌70誌)」『京都橋大学研究紀要』35
- 村田菜穂子(二〇〇八、七)「語彙(史的研究)——特集 二〇〇六年・二〇〇七年における日本語学界の展望」『日本語の研究』第4巻3号、7月、日本語学会
- 森岡健二ほか編(一九八二)『講座日本語学4 語彙史』明治書院
- 湯浅茂雄(二〇〇二)「第12章 語彙研究史」『朝倉日本語講座4 語彙・意味』朝倉書店
- 湯浅千映子(二〇〇九)「小学生新聞の言い換え操作——動詞を対象に——」『(韓国)日語日文学研究』(韓国日語日文学会) 70

ENGLISH SUMMARY

Various Features of the Japanese Lexicon and some New Concepts for the Historical Study of the Japanese Lexicon

Seiya ABE

In this paper, the following points regarding some lexical categories in the historical study of the Japanese lexicon will be considered. In particular, the following three points will be discussed: "brake effect" reaction to lexical change, counter-phenomenon to lexical change and the neutralization of the concept of distinct lexical categories. Finally, points for further study will be proposed.

Key Terminology:

historical study of the Japanese lexicon,
lexical categories of Japanese lexicology,
"brake effect" reaction to lexical change,
counter-phenomenon to lexical change,
neutralization of the concept of distinct lexical categories,